

大震災余滴より

鍵岡正謹

今年に関東大震災から90周年に当たる。大災害を体験し大震災の光景を25枚のパノラマ画にした岡山県和気町出身の徳永仁臣、号は柳洲の全貌が判りはじめ、展覧会図録に小伝を書いた。▼徳永はパノラマ画という視覚アートを巡回可能な装置にして大震災の惨状を国民に知らしめようとした。明治初期に育てられた洋風画家の誠実な行為であった。▼竹久夢二は新聞や雑誌で大震災を画文に表現し、そのなかに画文「表現派の絵」がある。有島生馬だろある友人が被災を前にドイツ表現派(「三角派」)の絵がやっと解ったという下りがあり、夢二はその光景をドイツ表現派を模して挿画にする。田山花袋も表現派の絵のようだと大震災紀行に書いていた。▼ドイツ表現派の木版画作品展は1914年3月山田耕筈と斎藤佳三がドイツから持ち帰り日比谷美術館で初公開された。有島生馬は兄武郎につれられ見ている。その年夢二は呉服橋に港屋絵草紙店を開いた。▼震災の年初め、村山知義がドイツより帰国し7月にマヴォを結成、構成派・未来派・分離派・表現派らの前衛芸術は浅草仲見世で開催された。二ヶ月後に関東大震災が起きた。マヴォ連中らの意気は盛んで、ドイツ表現派と同じように美術・演劇・文芸らに広がる。あたかも大地震のエネルギーが社会変革を目指す前衛芸術家に火をそそぐが如くに。▼有島生馬は震災3年後に《大震災の印象》と題した暗示的な大作を描いた。表現派の粗野でいびつな始源性によるヨーロッパ近代の危機意識を絵画にする表現とは異なる、日本近代化の運命を印象派の手法で予言的に描いた。▼東日本大震災を体験した我等は、今更に今こそ、関東大震災を体験した美術家たちを丁寧に見直さねばならないと思う。でないと、震災後から現在に至るまでの歴史に無知となり終わる。

岡山県立美術館
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/

交通案内 JR岡山駅東口から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分
・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

編集後記

大山真季

美術館ニュース102号をお届けします。猛暑続きの夏からようやく解放され、芸術鑑賞をするに相応しい季節となりました。瀬戸内国際芸術祭の開催や、ここ岡山県では美作国建国1300年記念事業の催しが県内各地であり、今秋は例年にも増してイベントの多い時期となっています。この機会に県外から岡山へ来られるお客様もいらっしゃるかと思いますが、その際には是非当館にもお立ち寄りいただき、展覧会をご観覧いただけたらと思います。11月1日から4日までの期間は特別展「中原浩大展」と「極楽へのいざない」2本同時開催となります。



「美術館の紹介」vol.2

岡山県立美術館の内装には、山を想像させる三角形を多く発見できる。館内を歩きながら、壁に、手摺りに、天井に、あらゆる素材の△を見つけてほしい。

「中原浩大展 自己模倣」を待ちながら

高嶋雄一郎(学芸員)

この展覧会がどうして当館で開催されるのか、その経緯は図録に書くつもりなのでここでは省き、展覧会をかたちにするに際してどのような姿勢で臨んだかを記したい。というのも、近ごろ展覧会の「仕立て方」に関して色々と思うところがあったからだ。

展覧会(企画展)と言えば、学芸員が出品作を決め、作品を借用し、その解説を書き、観客に展示室でご覧頂くのが基本的な流れだろう。もちろん出品の可否はさまざまな要素に左右されるとは言え(保存状態や所蔵者の意向、そして担当者の力量などが原因で叶わないことも少なからずある)、学芸員があるテーマのもとに作品を選ぶのは間違いない。こと現代美術の展覧会は今日でも一つの時代概念を提示するものが求められがちなため、グループ展などにおいてはそのテーマが(展覧会名に冠されるなどして)全面に出された展覧会も決して少なくないだろう。最近私が関わる企画の一つでも、協力者から何度となく展覧会のコンセプトはどうなっているのか、何を基準に選んでいるのかなどを重ねて尋ねられ、我々企画者側はそこを練り上げるのにずっと頭を悩ませていた。

こうした展覧会の仕立て方はいつから始まっているのだろうか。私の不勉強もあり定かではないが、例えばニューヨーク近代美術館の開館記念展「セザンヌ、ゴーギャン、スーラ、ゴッホ展」を鑑みれば、こうした作家の選択、つまりは当時のヨーロッパの前衛を1929年にアメリカで紹介することに、美術館をただの展示場とはせずある意志や姿勢を持って価値付けを行ない、未見の美術史を紡いでいくとの気概を持っていたことが窺えはしまいか。また私の知る狭い分野の話ばかりが続いて恐縮だが、ポップアートが知られる契機となった1962年の「ニューリアリズム」展などを考えても、半世紀前にはすでにそうした「新しさ」を売りにした展覧会がこと現代美術において花形となっていたと言えるだろう。

もちろん、こうした展覧会の「新しさ」には色々な理由があつてのことだ。たとえば、もし今なお(博物館法に謳われている通り)展覧会が学芸員の研究発表だと言うならば、何度も開催されてきたような泰西名画や著名作家を並べただけの展覧会がむしろその意義を疑問視されるべきで、逆に言えばそうした反動から

《無題(レゴ・ワーム)》再制作風景 2013年7月



《フリーザーの使用》(1991-94年)の状態確認中 2013年5月

未見の美術に価値を見出そうとする一種の「青田刈り」へと我々を向かわせるのも致し方ないことだからだ。ただしそのためには、常に学芸員はいまだ観ぬ価値を有する(と信じられる)作品や作家をフィールドワークで探し続けるか、多くの書籍や他分野からの援用を経て美術にかつてない視点を全方位から付与するしかないだろう。

ただし、特にその後者に関して私が言及したいのは、何か斬新な視点を主張せんとする意気込みばかりが先行してその引用が牽強付会に墮したり、展覧会の視点から切り取られたその作家のごく一局面だけがその表現の全てかのように世間に認識されたりすることがないだろうか、ということだ。一方で観衆の視線は以前にも増して鋭くなり、彼らはそうした企画者の恣意を見抜くような時代になっているとも感じるのだが、にしても提示する側としての配慮や誠意——作家に対しても観衆に対しても——が欠けるのは避けなければならない。

こうして私自身が展覧会を準備する際に最も注意しているのは、出来るだけ企画者側のバイアスをかけず、作品や作家の意図、そしてときには美術の綿々たる歴史にとって意義がある何かをときに客観的に、ときに本能的に見出し、ノイズのないクリアな状態で公に持ち出すことだ。また今日ほど、作家自らが言葉を発しそのまま即座に観衆へと届く仕組みも普及しており、数多のSNSなどのメディアにおいて、ここまで多くの顔も知らぬ人々が何かを論じ尽す時代はかつてないだろう。となれば、われわれ学芸員という立場が知識(情報)以上の解釈を声高に述べる時代は終わっているのではないか——もちろんそのネットの大海原には多くの曲解や事実誤認などもあり、その言説は玉石混淆だとも言わざるを得ないが、だからこそ我々が提示すべきは虚飾を配したストレートな事実としての作品、それを捩じ曲げることなく観るための場、そして未曾有の価値を模索する過程を作家と横並びで共有することなのだ、と思っている。

そのような思いの行き着く先で、本展ではさらに展覧会を作家活動の一断面にすぎないと自覚しながら、その前後に広がる作家の過去と未来をも予見させるような展示を志してきた。どこまで上手くいくか定かではないが、ただでさえ制約の多い美術館での発表において、墓場と揶揄されるスタティックな状況を脱し、どうやって作家の「いま」に来館者を追走してもらうのか。自分が美術と今後どう関わっていくかを考える上でも、この場を一つの試金石としたいと思っている。

この国の価値観・再発見ワークショップ

岡本 裕子(主任学芸員)



ワークショップ第3弾「水で遊ぶ」より

「わからないから知りたい」という探究心が活動の根源にあると語られる森山知己氏(日本画家)に、ご縁があり出会うことができました。そこで生まれたのが、歴史の中に埋もれてしまった「そもそも(なぜ)」に立ち返ることを通して、この国の価値観をみつめてみようというワークショップです。

第1弾「毛筆という道具」は、筆や紙、絹を「メディア＝記録する道具」ととらえ、用途に応じて技術革新された機能を、原点に戻って体感することから発見を試みるワークショップです。まずは、毛筆で線を引くことを、非常に粗野だった原初的な紙や絹の上で行います。きちんと記録しておくためにはくゆっくりかくく筆をおくように動かすこと、つまり相手(紙や絹)を筆でしっかりとつかまえること(体と筆が一体となり、筆先が指先のセンサーのようになること)が必要だった、ということに気づきます。同時に、墨がきちんと凹部にまで入るようく墨の流動性も求められます。そのためには、流動性のあるく水の力くが必要だということにも気づきます。『絵の具はおくように描きましょう』小学校の先生から言われた記憶が蘇ってきます。

第2弾「墨と水でつくりだす世界」は、滲みの美しい華蓮箋かに、水の特性を積極的に活かした墨表現に挑戦することから発見を試みるワークショップです。いつの間にか「はみ出さないように」「滲まないように」表現することが、唯一無二の表現だと思い込んでいないでしょうか。流動性がある水の力を積極的に活かすことでく多様

で豊かな世界くに出会うことができます。伊藤若冲が得意とする筋目描きも、水の力を積極的に取り入れたことから生まれているようです。また、紙のサイズを半切にしたことで、大きな表現をするためにはく腕(体)の使い方くが重要であることに気づきます。『脇をしめないで』『肘をあげて』と書道の先生から言われた記憶が蘇ってきます。書道には「懸腕」という肘の使い方があります。物事が上達する「腕が上がる」はここからきているとのことです。

第3弾「水で遊ぶ」は、滲む紙「生紙」から滲まない紙「熟紙」に、そして書の筆法と絵画が、新たに水と出会うことで生まれた「たらし込み」に挑戦することから発見を試みるワークショップです。流動性があり時間と共に蒸発する水の力を借りて、筆をおくように動かしながら天然岩絵具や金泥をおいていきます。緩やかな時間の経過と共に、それぞれが位置を決めて沈殿しながら美しく発色していく様子を体験することができます。く宗達・光琳・抱一たちが生きた時代の美意識くをリアルに味わうことができます。

「毛筆という道具」から始まった『この国の価値観・再発見ワークショップ』は、原初的なこと(もの)を体験することを通して、く水の豊かさくやく緩やかに流れる時間の経過く、そしてく身体感覚くを表現に活かしてきたというくこの国の有り様くを、今を生きる私たちに気づかせてくれるようです。さて、第4弾の切り口は如何に。そこからみえてくるこの国の価値観とは。

風を感じて —岡山県新進美術家育成「I氏賞」事務局より—

古川 文子(学芸員)

夕べの風に涼やかな虫の音が響く頃、「I氏賞」事務局は二つの展覧会の準備に追われています。

岡山県にゆかりのある新進美術作家を支援し育成することを目指し、平成19年度にはじまった「I氏賞」も今年度で第7回を数えます。その趣旨に基づき、県内外の美術関係者の方々から多くの御推薦をいただき、書類審査による一次選考を通過した候補者の作品発表と二次選考の場を兼ねた展覧会を毎年行っています。この「I氏賞選考作品展」会期中に、大賞(1名以内)奨励賞(2名以内)が選ばれ、例年2月半ばに公式発表となります。今回はどんな候補者、作品と出会えるのか、いつもワクワクしながら事務を担当しています。

また年末年始にかけては、当館で3回目となる「I氏賞受賞作家展」を開催します。このたびは、平成21・22年度に大賞を受賞した松井えり菜、児玉知己による二人展。受賞後の活動の様子を、新作も含め御紹介します。ギャラリートークなど会期中の催しも計画中ですので、どうぞお楽しみに。

今夏、県内で開かれたI氏賞受賞者二人の個展を訪ねました。新見美術館の「加藤竜¹展」は、地球環境をめぐる深刻なテーマを鮮烈な色彩と激しく躍動する筆致に込め、見る人の心に訴えかけてきます。初日から4日間行われた公開制作ではキャンバスにぶつける気迫に圧倒されました。初めての試みとは思えない落ち着きぶりは、プロ棋士のもとで囲碁の修業を積んだ少年期のエピソードを想起させます。芸術の力を信じ、ベルリンで“戦い”続けると語る彼の言葉に、緑豊かなふるさとの眺望が重なり、創作の原点を見る思いがしました。続いて岡山県天神山文化プラザで開催された「北川太郎²彫刻展」は、対照的な静の空間。鑿跡に反射した淡い光に包まれ、戸外のにぎやかな蟬の声も岩にしみ入るかのようでした。薄くスライスした石を積み重ねた《時空ピラミッド》、黒御影石を鑿で刻んだ《静けさ》の二つのシリーズは、3年間のペルー滞在を経て、石に宿る“時間”との対話の中で生み出された境地です。さかしらな個性を排した造形は、遠くインカ帝国の石組みや日本の情趣にも通じるおらかな美しさを湛えています。二人の作家に共通するのは、自然の力を思わせる真っ直ぐな強さ。それぞれに歩んだ道のりの先に新たな可能性を追求する若さが、颯爽と心地よい展覧会でした。

「I氏賞」は、岡山県高梁市出身の伊藤謙介氏から上記の趣旨で寄せられた寄附金を基に運営されています。受賞者に贈られる賞金はもちろんですが、選考作品展や受賞作家展の場も、若い作家たちに役立ててもらえればと思います。事務局に携わるようになって、想像以上にたくさんの方が本賞に共感し応援してくださっていることを知りました。最近感銘を受けた“春風煦育”という言葉が思い浮かびます。若手の成長を見守る春風のあたたかさを感じながら、忙しい冬に備えたいと思います。

第三回I氏賞受賞作家展(会場:当館2階展示室) 2013年12月13日(金) - 2014年1月19日(日)
第7回I氏賞選考作品展(会場:岡山県天神山文化プラザ) 2014年1月28日(火) - 2月9日(日)



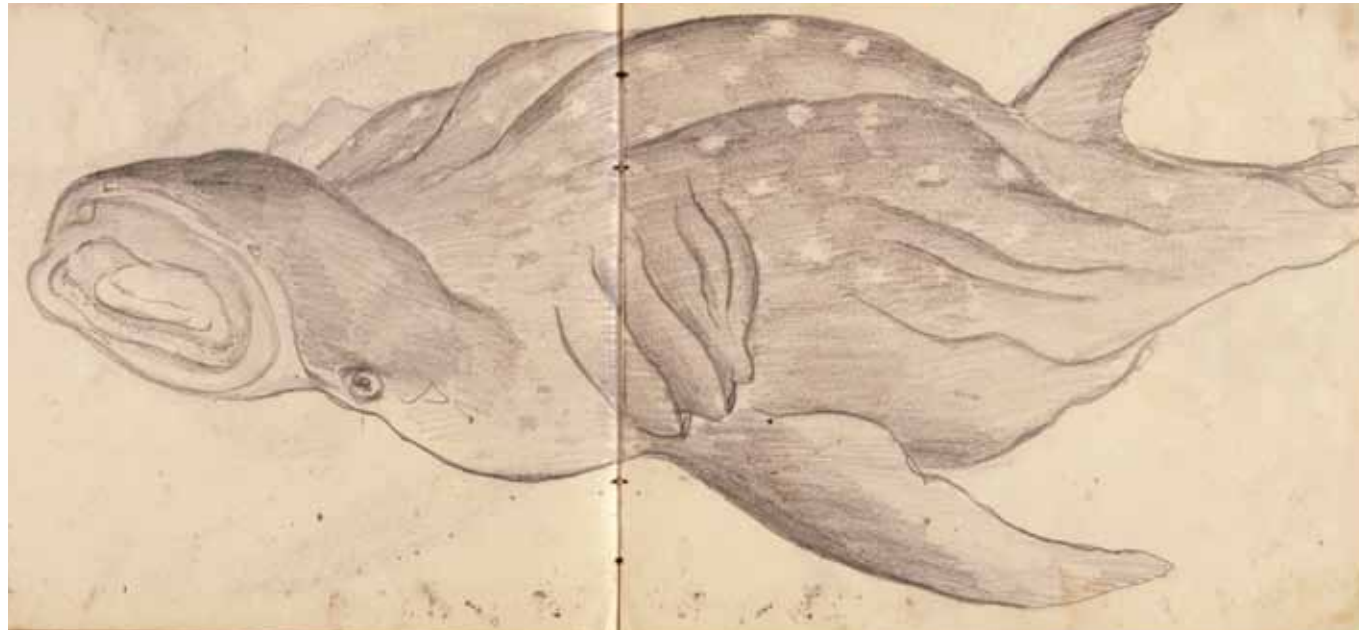
「加藤竜展」初日の公開制作
※1 第5回大賞受賞者 1978年岡山県新見市生まれ、ドイツ・ベルリン在住



「北川太郎彫刻展」展示風景
※2 第6回奨励賞受賞者 1976年兵庫県姫路市生まれ、倉敷芸術科学大学非常勤講師

研究ノート 徳永仁臣スケッチ帖より

橋村 直樹(学芸員)



徳永仁臣スケッチ帖より、ジンベイザメ

現在、岡山県立美術館では「知られざる震災画家 徳永仁臣-柳洲-」展を開催しています。徳永仁臣(号柳洲、1871-1936)は、備前国和气郡藤野村(現、岡山県和气町)に生まれ、岡上で松原三五郎に洋画を学び、上京してからは二世五姓田芳柳に師事した画家です。当時の日本最大の日刊紙『萬朝報』で挿絵を描いて活躍しながら、ヨーロッパにも渡って明るい色彩による印象派風の作品を残しています。関東大震災に際しては、その惨状を伝える25点もの巨大な油彩画を制作し、巡回展を行うことで被災者のための義援金を募りました。晩年は富山に移住して日本画の研究を行い、洋画と日本画との融合を目指しながら立山や黒部峡谷といった豊かな富山の自然風景を精力的に描き続けました。

このような徳永仁臣の画業を振り返るこの展覧会では、代表的な油彩画や晩年の日本画だけでなく、徳永が愛用していたいくつかのスケッチ帖も展示しています。それらのスケッチ帖には、人物や風景、あるいは目に留まった身近な動植物が、メモ書きのように簡単に描写され、あるいは場合によっては彩色下絵のように丁寧に描かれています。ここで紹介するのは、晩年の富山時代のスケッチ帖からの素描です。見開き一頁に大きく描かれているのはジンベイザメで、尾びれ部分は次の頁におよんでいます。また、この前の見開き頁にも同じジンベイザメ

がより簡略にスケッチされていて、そこには「昭和二年八月十七日写ス／水橋海岸で捕獲シたる／教育参考海主大怪物／身長四間胴廻り二丈／口の廻り一丈五尺／尾の長さ一間半／體重五百貫／水橋横浜海岸立網にて」や「鹿の如き白き斑点あり」とのメモも記されています。「身長四間」や「尾の長さ一間半」、あるいは「體重五百貫」というメモから推察すると、富山湾に迷い込んだこのジンベイザメは全長が約10メートルで体重が約1.8トンの巨大なものだったようです。この巨大なジンベイザメを徳永は「海主大怪物」と表現し、その特徴的な斑点模様を、「鹿の如き」と言い表しています。身近な海で捕獲された「大怪物」ジンベイザメの姿を記録して伝えようとする報道的姿勢は、『萬朝報』の仕事を通して培われたものであったといえるでしょう。

晩年になって徳永は、岡山の美術雑誌『鳥城』(昭和8年1月)の中で「私は若い時分から何でもかでも寫生帖にスケッチをして何時でも間に合ふ様心掛けて随分永い間に澤山溜てゐたものだが十年前全部鳥有に歸したのでさあ無くしてからは不自由でならぬ」と述べています。おそらくかなりの冊数にのぼっていたと思われる若い頃から描きためたスケッチ帖は、「十年前全部鳥有に歸した」とあるように、残念ながら関東大震災で焼失してしまったのです。

展覧会スケジュール

9月
September

8月30日|金|—10月20日|日|

【岡山の美術展】
徳永仁臣-柳洲-展

9月27日|金|—11月4日|月・祝|

【特別展】

中原浩大展 自己模倣

KODAI NAKAHARA: Migration or Retrospective

本展は、1980年代から現在に至るまでその独創的な作品と活動で多大な影響を与え続けている美術家・中原浩大の初の回顧展になります。久しく展示されてこなかった初期の代表作はもちろんのこと、失われた作品の作家自身による再制作、当時実現出来なかった計画の再現、また近年新たに試みている作品の展示などによって、本展は、この作家の比類ない足跡、その過去と現在を巡るまたとない機会となるでしょう。
(瀬戸内国際芸術祭2013広域連携事業)

展覧会期間中、当館学芸員による
ギャラリートークや美術館講座など
随時開催予定。詳しくは当館HPまで。
<http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/>

10月
October

10月6日|日| 14:00~15:30

鼎談 「徳永仁臣-柳洲-について語る」

講師 政田孝(徳永柳洲顕彰会副会長)

鍵岡正謹(館長)
橋村直樹(学芸員)

会場 地下講義室(先着70名)

10月12日|土| 14:00~15:30

対談 「関口敦仁×中原浩大」

講師 関口敦仁(美術家)、中原浩大(美術家)

会場 地下講義室(先着70名)

10月13日|日| 14:00~16:00

WS 「blue print」

講師 中原浩大(美術家)

会場 研修室(先着50名) ※順次参加いただけます。

参加費 100円

対象 特になし ※未就学児は保護者同伴

11月
November

11月1日|金|—12月8日|日|

【特別展】

極楽へのいざない

—練り供養をめぐる美術—

練り供養とは、阿弥陀とそれに従う菩薩たちが死に臨んだ人のもとを訪れ、極楽に連れ帰るといふ“来迎”の様子を演じる宗教行事です。現在も瀬戸内市弘法寺、久米南町誕生寺、奈良県当麻寺など全国で行われています。本展では、練り供養成立に至るまでの浄土信仰の流れを地獄絵や来迎図などから紹介し、行事で使用される面や道具、礼拝対象となる阿弥陀如来像などからその歴史や諸相を総覧します。国宝2点、重要文化財多数を含む仏教美術の名品をお楽しみ下さい。

11月4日|月・祝| 13:30~15:00

公演 「天台声明公演」

公演団体 魚山流天台声明研究会

会場 2階ホール(先着210名)

12月
December

11月12日|火|—12月8日|日|

第60回日本伝統工芸展岡山展

12月13日|金|—2013年1月16日|日|

【岡山の美術展】

第3回I氏賞受賞作家展

11月16日|土| 13:30~15:00

記念講演会 「極楽からいざなう阿弥陀の造形～迎講から練供養へ～」

講師 關信子氏(極楽へのいざない展監修・美術史家)

会場 2階ホール(先着210名)